ISSN 0919-0120
2011. No.78

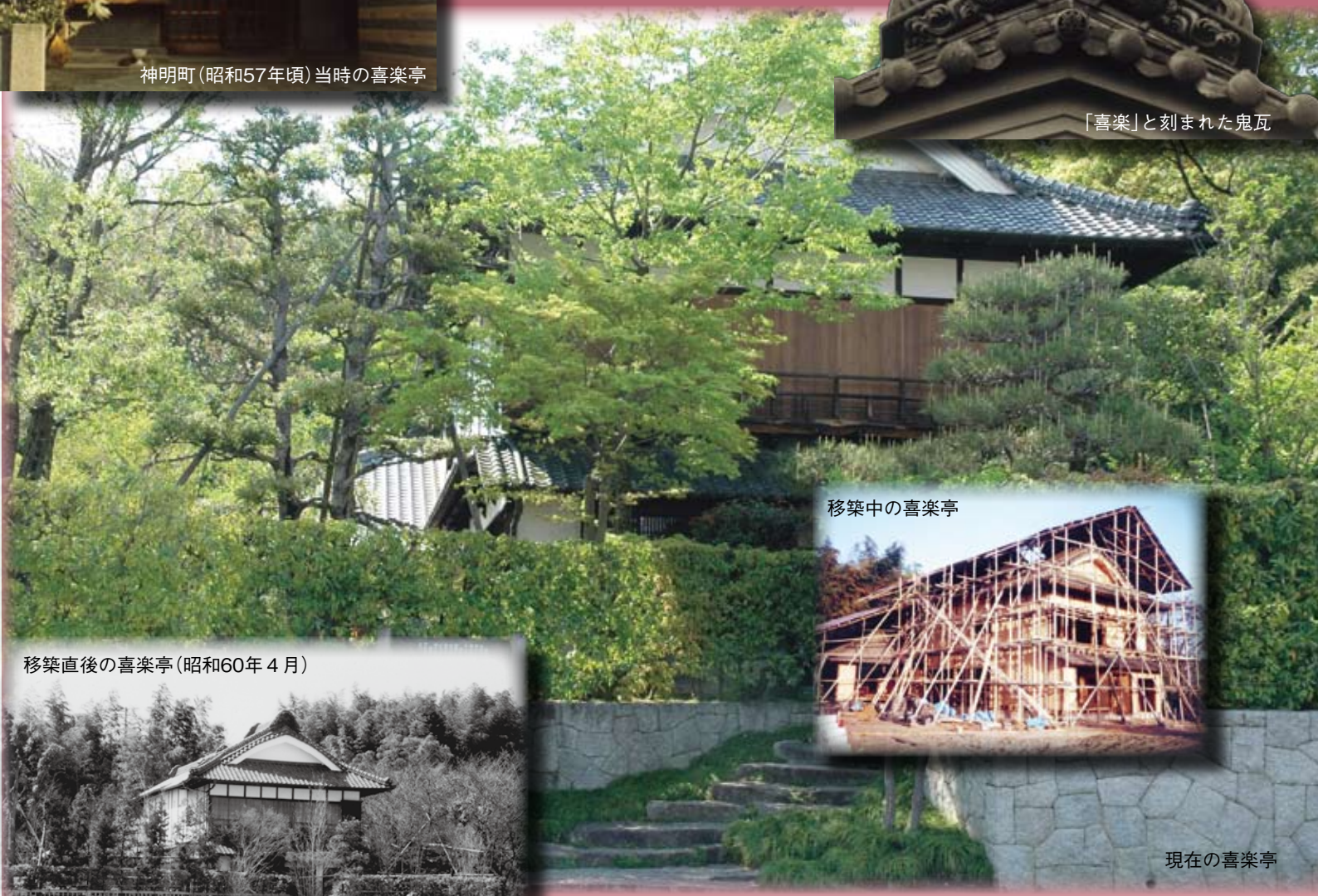
神明町（昭和57年頃）当時の喜楽亭

豊田市資料館 郷土だより

No. 78

Toyota City Museum
Of
Local History

「喜楽」と刻まれた鬼瓦



移築中の喜楽亭

移築直後の喜楽亭（昭和60年４月）

現在の喜楽亭

目　次

・民具調査だより -5　温まる道具 ― 湯たんぽ・湯湯婆・湯丹保 …… 2
・大正ロマンあふれる建物　「喜楽亭（きらくてい）」をご存知ですか？ …… 3
・特別展を終えて　～「地芝居」という文化～ …… 4
・ミツドンブリを追いかける　―近世・近代の食文化(1)― …… 5
・足助の町並みの保存と活用　―豊田市足助伝統的建造物群保存地区― …… 6
・古民家の見方②　エコロジーな工夫 …… 7
・文化財シリーズ 78　市指定文化財　村上家千巻舎 …… 8
・資料館ＮＥＷＳ …… 8

■民具調査だより-5

温まる道具―湯たんぽ・湯湯婆・湯丹保

はじめに

３月11日の大震災から、私達日本人はエネルギー問題に直面し暖房のこと、冷房のことなど個々の暮らしの中でのあり方を深く考えるようになりました。節電の夏が終り冬を迎える時節になり、石油ストーブや湯たんぽの売り上げが急増しているようです。石油ストーブは電気を使わないでも暖をとれますし、煮炊きにも使えますから重宝な道具です。湯たんぽも、やさしい温かさから赤ちゃん用にと販売は続けられていましたがこの冬の売り上げの上昇は特別なようです。

さまざまな形と素材

金属・陶器・プラスチック・天然ゴムなどで作られた容器に湯を注ぎ栓をし布カバーなどでくるみ、これに触れて暖をとる道具が湯たんぽです。豊田市内の各資料館には数多くの湯たんぽが収蔵されていますが、それらの中の代表的な物を紹介してみます。

●写真１-〈亀の甲羅型〉左は陶製の物で栓も陶器。右はもっとも一般的なトタン製の物。亀の甲羅型は大正期にヨーロッパにあった金属製を模して作られたようですが、胴の波は薄い鉄板の強度を増すための工夫で日本オリジナルです。そして、このトタン製を模して作られたのが左の陶製。戦時中の“代用品”として作られました。側面に「福壽」とか「福福」の文字があり、その下に統制番号（生産者別識別番号）が入っていたりします。[●写真２参照]

●写真３-トタン製の亀の甲羅型ですが、全体に薄く仕上げられていて、波の入り方も特徴的です。

●写真４・５-〈カマボコ型〉貧乏徳利に湯を入れ湯たんぽとして使ったようですが、徳利に似た円筒型の湯たんぽの改良型としてこの形が生まれたようです。左は陶器製のネジ込み式栓、右は木製の栓を使います。まるでロールケーキのようでおいしそう！

●写真６-〈カマボコ型・国策湯丹保〉この様式の物には「愛国湯水丹保」と記された物もあります。夏は水を入れ“陶枕”として使うと共に飲料水の貯蔵にも使われたようです。

●写真７-〈トンネル型〉大変珍しい湯たんぽ。中空の胴の中に炭火を入れた金属製の火入れ器を入れ、湯が冷めないような工夫がなされています。大和炬燵と同様な使われ方をされました。

（東海民具学会　岡本大三郎）

●写真1　豊田市郷土資料館　左：W260 H117 D266(mm)
右：W330 H110 D240

●写真2 豊田市民芸館
「瀬　600の統制番号」あり

●写真3　豊田市近代の産業とくらし発見館　W335 H95 D246

●写真4 豊田市民芸館
W230 H110 D153

●写真5　豊田市民芸館
W395 H140 D162

●写真6　豊田市民芸館　W235　H95　D156

●写真7　豊田市近代の産業とくらし発見館　W280 H215 D254

大正ロマンあふれる建物

「喜楽亭（さらくてい）」をご存知ですか?

愛知環状鉄道「新豊田駅」を下りて西へ２分ほど歩くと、プラネタリウムで有名な豊田産業文化センター(以下産文)があります。喜楽亭は、産文の北側駐車場に隣接した場所に建っています。産文に訪れたことはあっても、そんな建物あったかなと思われる方は多いかもしれません。なぜなら喜楽亭は木々に囲まれ、一見すると個人のお宅のようで、公共施設のようには見えないからです。

＜正面から見た喜楽亭＞

＜玄関から続く廊下＞

中はどのようになっているのでしょう？石段を昇り、玄関から上がって見てみましょう。きゅっきゅっと音の鳴る長い木の廊下を進むと、１階には茶室や中庭、お風呂、２階には３部屋続きの床の間のある和室などがあります。建物を囲む庭園には小川が流れ、四季折々の木々の景色を楽しむことができます。自分が市街地にいることを忘れてしまいそうな程落ち着いた空間で、まるで大正時代にタイムスリップしたかのようです。訪れる人達の中には、初めて来たのにどこか懐かしさを覚える方も多いようです。

＜庭園の様子＞

この素敵な建物はもともとどのように使われていたのでしょうか？喜楽亭は、明治末期から昭和42年まで続いた料理旅館で、高松宮殿下や高橋是清大蔵大臣なども宿泊をしました。当時は神明町（現在コモスクエアがある辺り）に建っていましたが、昭和57年に所有者の長坂雪子氏より市にご寄贈いただき、貴重な建物を保存するため、昭和59年に現在の地に復元移築されました。建物の全てが復元されているわけではなく、当時は現在の2倍ほどの大きさがありました。

＜宴会部屋：奥の壁部分が元は障子であった＞

昭和30年代の営業時は、宴会や打ち合わせが毎晩のように催され、どんちゃん騒ぎで、それはそれはにぎやかであったようです。当時は、宴会といえば芸妓さんが付きものであり、お客さんの多くはなじみの芸妓さんを指名していたそうです。２階の３部屋続きの和室は、襖を取り払うと大きな１部屋になり、そこにずらりとお膳を並べて、大人数の宴会に使っていたとのことです。さらに、この部屋と廊下を挟んでもう１つ和室があるのですが、そこには芸妓さんが踊りを舞うための舞台が置かれ、廊下に面した障子を開いて、宴会のお客さんに披露していたそうです。現在は障子であった部分が壁になっています。

当時働いていた方が、お勝手の女中さん４人、お座敷の女中さん４人、板前さん３人の合計11人もいたことからも、お店の繁盛ぶりがうかがえます。喜楽亭は料理旅館でしたが、ここで結婚式を挙げられる方もいたようです。

昭和42年の廃業後は住宅として使用され、２階の空いた部屋には、四国や滋賀、一宮、豊橋などから豊田市に働きに来ていた小学校の先生が下宿をしていたそうです。

現在は、お茶会や展示会などの文化的な催しに、喜楽亭の部屋を利用することができます。貸出利用のない時には、建物の内部や庭園の見学が自由にできますので、ぜひ一度喜楽亭に足を運んでみてください。

今回記事を書くにあたり、長坂綾子氏のご協力をいただきました。お礼申し上げます。

（不破　恵理）

【喜楽亭】開館時間：午前９時～午後５時　休館日：月曜日、祝日、12/28 ～ 1/4　利用・見学に関する問合せ：豊田産業文化センター　(0565)33-1531

特別展を終えて

～「地芝居」という文化～

９月17日（土）～ 11月27日（日）にかけて、特別展「歌舞伎の衣裳と文化～地域に息づく農村歌舞伎～」を開催しました。多くの見学者が郷土資料館を訪れました。

来館者の中には子供の頃、小原の宝城座で地芝居（農村歌舞伎ともいう）を演じた方もおられ、毎日夜遅くまで練習した様子などをうかがうことができました。他にも岐阜県各務原市にある国指定有形民俗文化財の村国座で舞台画工をされている方から、お話しを聞くこともできました。展覧会を通して、歌舞伎に関係するさまざまな方々と交流することができ、展示が新たな出会いを生み出す一つのきっかけになっていることを実感しました。

特別展「歌舞伎の衣裳と文化」の展示の様子

豊田市内の農村舞台は、これまでに失われてしまったものを含めると130棟を越え、市内各地で地芝居が行われていたことが分かります。農村舞台で行なわれる地芝居以外にも、足助祭りや挙母祭りでは山車の上で歌舞伎が上演されていました。このように豊田市は各地で地芝居が行われており、人々にとって非常に身近な存在であったことが分かります。

地芝居の上演が最も盛んであったのは、明治期～昭和初期でした。市内各地に残された上演目録や大入袋などの資料から、当時の村人の歌舞伎に対する熱狂ぶりが感じられます。地芝居の上演は役者から裏方、観客にいたるまですべて村人の手によって運営され、まさに村全体で行われる一大イベントだったのです。

しかし、地芝居も昭和30年代には姿を消し、盛んであった頃に、舞台で演じた人も少なくなっています。今回の展示では、豊田市内において行われていた地芝居の当時の様子を掘り起こすことができ、とてもうれしく思っています。

地芝居の伝統は、市内にある小原歌舞伎保存会、小原辰巳会、旭歌舞伎保存会、藤岡歌舞伎、石野歌舞伎保存会の５つの歌舞伎保存会によって今でも受け継がれています。各保存会の方々には展示を企画するにあたって多大なご協力をいただきました。そこで感じたことは各保存会の方の歌舞伎に対する熱い思いです。地芝居をより多くの人に見てもらい、知ってもらいたいという気持ちをひしひしと感じました。

昭和20 ～ 30年代の北一色（藤岡地区）での地芝居の様子

市内の歌舞伎保存会は毎年公演を行なっており、実際に地芝居を見ることができます。今年はとくに市制60周年を記念して、市内の歌舞伎保存会が合同で行う農村歌舞伎公演を小原交流館において12月11日（日）に開催しました。少しでも多くの方に地芝居に興味を持っていただき、豊田に息づく素晴らしい伝統にぜひ触れていただきたいと思います。

平成22年　岩倉神社での歌舞伎公演（石野歌舞伎保存会）

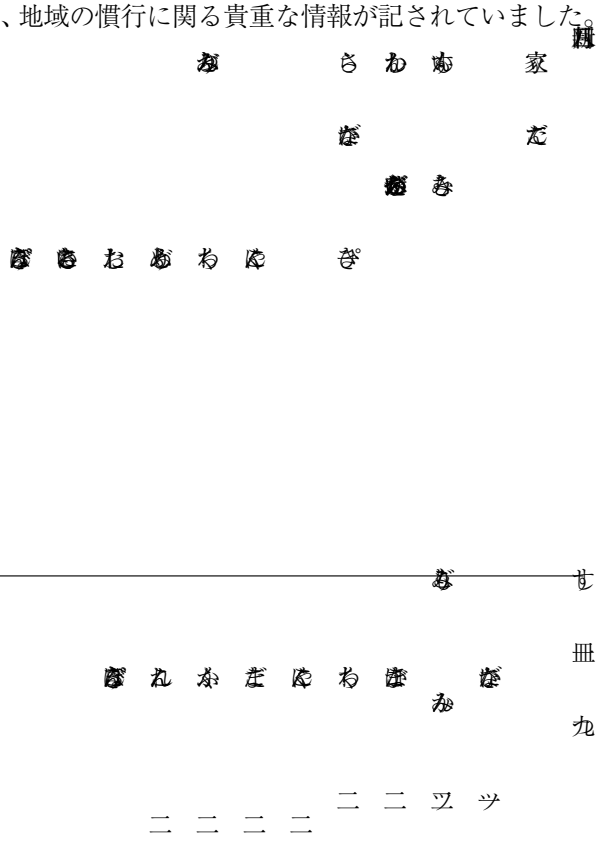
（神谷　一平）

ミツドンブリを追いかける
―近世･近代の食文化（1）―

先日、百々町にお住まいの宇野せつ子様から、日中戦争（昭和12～20年）において、中国北部で従軍していたご尊父（復員後、市内にて昭和18年没）が家族へ宛てた軍事郵便ほかをご寄贈いただきました。文面には、戦地から家族に想いを馳せる内容のほか、戦時下のため秋祭りにおいて平井の山車が２年連続で中止になったことに触れるなど、地域の生活に関する貴重な情報が記されています。

博物館実習で来館した実習生と共に、軍事郵便や、一般の書簡類、書類、帳面類、教科書など、ご寄贈いただいた資料群の分類を行いました。実際の歴史資料に触れることの少ない実習生には、大変良い機会になったようです。

さて、その中で一冊の帳面に目が留まりました。「昭和六年三月 普請覚」と表紙に墨書されており、裏表紙には「西加茂郡高橋村百々 宇野隆三郎」と記してあり、寄贈者の母方の祖父が遺したものであることが分かります。中身を見ると、家屋の新築に伴う祝い事の内容が細かに記されており、大工に支払った祝儀や、用意したお飾りなど、出版物などでは知ることのできない、地域の慣行に関する貴重な情報が記されていました。



「昭和六年三月普請覚」立家こんだて

ミツドンブリ（豊田市足助地区）

特に興味を持ったのは、「立家」の宴会で大工・客に振舞われた献立中の「みつどんぶり」という記述です。ミツドンブリは20㎝を超える浅い半球型の磁器で、三組一セットを基本とし、内面には赤・金彩の上絵付や濃紺の染付により揃いのモチーフが描かれています。

磁器生産は、当市近隣の瀬戸・東濃の各村において江戸後期から行われるようになります。生産器種は窯場によって異なっており、上記したような形態のドンブリは、岐阜県土岐市駄知町が産地として知られています。

この立家で実際に使用されたミツドンブリは現存しないようですが、この記述について寄贈者にお尋ねしたところ、昭和30年代末頃まで、祭りに伴う宴会でミツドンブリを出していたとお話し下さいました。後日、宇野様が老人会で同席した80代の女性からお聞きになったこととして、ミツドンブリはお祭りなどの祝い事や、葬儀・法事など、慶事・弔事に関らず用い、「里芋の煮物」「ニンジンと大根の酢和え」「キンピラ」を盛ることが定番だったと教えていただきました。手近に入手できる植物質の素材が、ミツドンブリに盛られていたことがわかります。一方で、「昭和六年三月普請覚」では、魚を素材とした「ちくわ」が登場する点から、本来は慶事・弔事で素材の別があったのではないか、家庭による流儀があったのではないか、といったことも考慮されます。

さて、ミツドンブリを用いる習慣はどれくらいの地域的な分布を持ち、歴史的にさかのぼることができるのでしょうか？また、その誕生や衰退のきかっけはなんだったのでしょうか？次回はより広い視点でミツドンブリに迫ってみたいと思います。

本稿を記すにあたり、寄贈者 宇野せつ子様から多くのご教示をいただきました。お礼申し上げます。

（髙橋健太郎）

足助の町並みの保存と活用
―豊田市足助伝統的建造物群保存地区―

足助の歴史的町並みは、平成23年６月20日に国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の選定を受け、昭和50年代から住民主体で続けられてきた足助の町並み保存が一つの区切りを迎えました。

この選定にあわせて、多くの方に足助の町並みの価値やすばらしさを知っていただき、町並み散策を楽しんでいただくために「足助町並み散策ナビ」パンフレットを作成し、足助地区の主要施設や豊田市内の公共施設などに設置しました。パンフレットには、足助の町並みの地図や町家の案内のほかに足助の町並みの特徴や歴史などが記載され、町並みを訪れる観光客が、パンフレットを見ながら足助の町並み散策を楽しむ光景が見られるようになりました。

また、この選定を記念し、８月６日に足助交流館で開催された重伝建地区選定記念シンポジウムでは、講演会やパネルディスカッションが行われました。会場には多くの住民の方にも足を運んでいただき、町中で選定を祝いました。

今後、修理・修景・許可基準に基づいた町並みの保存が本格的に始まります。修理基準は、江戸時代から昭和30年頃までに建てられた文化財的な価値のある伝統的建造物（保存地区内に206棟）を修理するための基準で、建てられた時代や足助の町並みの歴史を表すうえで最もふさわしい時代の建物に戻す復原修理を行います。修景基準は、伝統的建造物以外の建物で特に町並みの景観向上に貢献するための基準です。修理・修景基準に基づいた保存を行う場合は、行政の財政的支援や技術的支援を受けることができます。許可基準は、町並みを守っていくうえで最低限守るべき基準です。

保存地区内で新築や増改築を行う前には、現状変更行為許可申請書を文化財課に提出する必要がありますが、その前に地元住民等による組織の「足助町並み景観相談会」の確認を経なければなりません。このように住民のチェックを受けたもののみが、事業を行うことができる仕組みにより、住民主体の町並み保存を行っています。

その他には、現在行われている電線の地中化工事や下水道整備など生活環境の整備を行うとともに、観光客を効率的に誘導するサインや夜間に街道を照らす照明についても住民主体で検討が進められています。

一方で、観光や定住施策などにおいても足助の町並みを活用した取り組みが行われています。

11月１日から重伝建地区に選定された後、初めての「香嵐渓もみじまつり」が始まりました。全国でももみじの観光地として有名な香嵐渓に隣接する足助の町並みでも様々な取り組みが行われています。

町並みの町家や商家の一郭にアーティストの作品を展示する「足助の町並み芸術さんぽ」（11月12日～20日）や「あすけうちめぐり」（11月12日、13日）が開催されました。「あすけうちめぐり」は、住民の協力によって普段は見ることができない町家の内部を住民や観光客にこの日だけボランティアガイドの案内で公開し、６件の町家が公開されました。この中には足助で最上級の豪商であった小出家住宅や旧紙屋鈴木家住宅も公開され、住民の方でも初めて内部を見られた方や何十年ぶりに内部を見られた方など、観光客以上に関心が高いようでした。

また、足助の町並みのしっとりとしたたたずまいや生活風景を募集する重伝建地区選定記念フォトコンテストも行われました。応募された作品には、観光客の視点で撮影された、私たちが普段気付かないようなすばらしい町並み景観の写真もありました。

住民の定住への取り組みでは、足助自治区の定住委員により空き家所有者と定住希望者のマッチングを図り、空き家に定住希望者を受け入れることで、空き家の活用と少子高齢化などの人口減少への対応を進めています。

これからの足助の町並みは、毎年、変化の見られる生きた町並みになります。ぜひ、足助に何度も訪れていただき、足助の歴史的町並みの魅力を紹介している「足助町並み散策ナビ」を片手に足助の町並み散策を楽しんでいただき、足助の町並みの歴史に触れていただきたいと思います。　（多和田篤嗣）

古民家の見方 ②

エコロジーな工夫

近年、地球温暖化などの環境問題が非常に注目され、様々なエコロジーな取り組みがなされています。また、東日本大震災による原子力発電の停止は、エネルギー問題を考えるきっかけとなりました。

写真１　昔ながらの民家

これら環境やエネルギー問題の解決のため、自然と上手に付き合っていた昔の日本の暮らしを見直す動きが高まっています。

日本の昔ながらの古民家には、長年積み重ねられた暮らしやすくするための様々な工夫があります。そんな古民家のなかから先人のエコロジーな工夫を紹介します。古民家は､「夏の家」といわれることがあります。寒さは囲炉裏(いろり)を炊くことで凌(しの)げますが、夏の暑さは如何(いかん)ともしがたいので、いかに涼しく過ごせるかに重きが置かれています。

夏に家の中を涼しくするためには、日射を遮ることと換気をすることが必要です。昔の家は屋根が大きく掛かっており、庇(ひさし)が長くなっています。また窓の上に庇がついている場合もよくみかけます。庇によって窓からの日射をコントロールしているのです。

現代の家は、いつからか窓の上の庇がなくなってしまいましたが、室内への日射を防ぐために葦簀(よしず)を窓に掛けたり、緑のカーテンと呼ばれるゴーヤなどの植物を窓際に這(は)わせるなどの工夫は最近でもよく見られます。

続いては換気の工夫です。古民家は壁が少なく、障子などの開口部が沢山あります。様々な種類の戸があり、その目的に応じて用いられています。

簾戸(すど)をご存知でしょうか？建具に簾を組み込んだものです。簾のすき間から風が通ります。

夏に障子と入れ替えて、風通しを良くしていました。

季節によって建具を入れ替えることは機能的であり、趣もあり素敵ですね。

写真２　簾戸の例

冬の日中は日差しを家の中に入れる工夫がされています。屋根の庇は、太陽高度の高い夏には日射を遮りますが、冬は低い位置から光が差し込むため、家の奥まで光が入るようになっています。壁が少なく開口部が多いので、日射による暖かさを取り入れるのです。

夏に重きを置いた古民家には、寒さの対策が必要です。古民家の家の中心には囲炉裏(いろり)がありました。囲炉裏は家族の集まる場であり、家の中で火を起こし煮炊きをしていました。冬には暖房として重宝されました。火を起こすことで暖を採れるだけでなく、茅葺屋根などや木材を燻(いぶ)すことで虫から守る効果がありました。ひとつの火で一石三鳥の効果があり、少ないエネルギーを上手に活用していました。

最近では、竈(かまど)や囲炉裏は見られなくなりましたが、限りあるエネルギーを最大限活用することを見習いたいものです。

このほかにも古民家には自然と上手く付き合う工夫が詰まっています。そんな視線で古民家を見ると新たな発見があるかもしれません。　　（松川　智一）

写真３　囲炉裏の例

文化財シリーズ

78

市指定文化財
村上家千巻舎

豊田市高岡町新馬場に市指定文化財（建造物）の村上家千巻舎があります。千巻舎とは、江戸時代から明治にかけて活躍した国学者・村上忠順が集めた書籍を納めた土蔵造りの建物で、娘婿の深見篤慶が明治７年（1874）に建立しました。伝統的な土蔵造りで、防火・防湿に優れた構造となっています。内部の壁面には一枚板の書棚が４段めぐり、多くの書物が納められても大丈夫な造りになっています。東側の下屋は後の増築で、書物の出し入れや整理、閲覧の空間として利用されたと言われています。

千巻舎の蔵書のほとんどは大正３年に刈谷の篤志家宍所俊治、藤井清七が一括購入し、刈谷町に寄贈しました。現在では刈谷市中央図書館の村上文庫となっています。

村上忠順は、文化９年（1812）に堤村新馬場の刈谷藩医、村上忠幹・美志子の次男として生まれました。小さい頃から学問を好み、４歳で唐詩選をそらんじたと言われています。国学のほかにも医学、画、歌についても学び、忠順には150人以上の門人がいました。生涯に歌集・国学書合わせて77部を著作し、和歌５万首を詠みました。また、収集した書籍２万５千巻、書写６千巻をこの千巻舎に納めて、保管・研究を行いました。

千巻舎の名前も、このように収集した膨大な書籍が由来となっています。

資料館NEWS

10月29日（土）に特別展「歌舞伎の衣裳と文化」の関連講座「押し隈体験～君も歌舞伎役者～」が行われました。この講座は、美濃歌舞伎博物館相生座館長小栗幸江先生を講師に迎え、歌舞伎の歌史や歌舞伎の化粧について解説していただいた後に、参加者が歌舞伎役者の隈取と隈取を布に写し取る押し隈を体験する講座です。

隈取とは、歌舞伎役者が行う化粧のことで、目や鼻筋に赤や黒の色を入れて顔を際立たせるものです。今回の講座で行った化粧は一本隈といわれる隈取です。隈取は書き直すことのできない化粧であるため、参加者は小栗先生に質問したり、隈取をしたスタッフの顔をよく観察しながら、赤や黒の線を一本一本丁寧に入れていました。隈取が完成すると、歌舞伎役者のように見得を切る参加者や写真撮影をする保護者の方が多く、満足した様子でした。

最後に隈取を布に写し取り押し隈を作りました。モデルとなったスタッフの隈取が布に写し取られた瞬間、会場から「お～!!」という歓声が湧きました。同じ型の押し隈であるのに一人一人微妙に違う押し隈を、嬉しそうに持ち帰る参加者を見て、少しは歌舞伎に興味を持っていただけたのではないかと思いました。

利用案内

開館時間　9：00 ～ 17：00
休館日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入場料　無料（特別展開催中は有料）
交　通　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩５分
駐車場　約20台

■豊田市郷土資料館だより　No.78■

平成24年１月25日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館

〒471－0079　豊田市陣中町1－21
☎（0565）32－6561　FAX（0565）34－0095
E-mail：rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL：http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。